

幼児の教育 第99巻 第5号 平成12年5月1日（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第3種郵便物認可 ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

2000 / 5



第99巻 第5号 日本幼稚園協会



保育実技シリーズ

最新刊!

①30分でできる壁面アイデア

浅野ななみ 監修

制作者/石川元子・千金美穂・渡守武裕子

基本パターンを使って、効率よく時間をかけずに見栄えのいい素敵な壁面を作ることができるアイデアが満載。基本的な製作上のポイントを教える「30分で作るためのテクニック講座」付き。12か月の季節感あふれる壁面と誕生表を紹介。作り方、型紙も付いています。

AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税



②30分でできるプレゼントづくり

阿部直美 監修

制作者/木曾健司・小沼かおる・門井幸子・宮崎由美子

誕生会をはじめ、各種園行事に必要なプレゼントや誕生カードのアイデアと作品の数を月別に紹介。身近な素材を活用して、簡単にでき、記念としても残る作品を満載した本書は、忙しい保育者の力強い味方になります。作り方と型紙をつけたので、誰でも容易に作れます。

AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税



③30分でできる小物づくり

鈴木みゆき 監修

制作者/あかまあきこ・佐々木伸・高野まどか・立花愛子

保育の中で使える小物のアイデアを月ごとに紹介しています。季節や行事などを考慮し、現場で使いやすいように配慮しました。各月の保育のポイントがわかる「保育一口メモ」付き。作り方や型紙も付け、バリエーションも豊富に掲載しています。

AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税



④30分でできるおたよりづくり

小山孝子 編著

イラストレーター/岸本真弓・ヤスダイクコ・あかまあきこ

おたよりを素早く作るパーツ集。まず、Q & A形式でそのコツをやさしく解説。そして、園だより、クラスだより、行事だよりの各書き出し文例を紹介し、その後、見出し例、囲みケイ・飾りケイ、イラストを配しました。本書があれば、あなたのおたよりづくりは万全です。

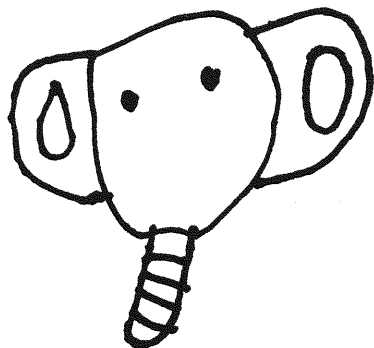
AB判・96頁・定価：本体2,200円＋税



キンダーブックの
フレール館

幼児の教育

第99巻 第5号

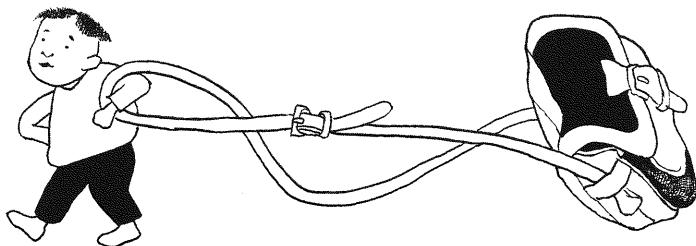


幼児の教育 目次

— 第九十九卷 第五号 —

© 2000
日本幼稚園協会

からだだからこころへの発信―体ほぐしとダンス―……………片岡 康子……………(4)	私が幼児教育を志した頃(7)……………津守 真……………(11)
保育の見直し―その一……………加藤いづみ……………(20)	老若男女共同参画社会の子育てを見通す(4) ―生涯発達の“ふるさと”として―……………金田 利子……………(28)
耳をすまして 目をこらして(2)……………宮里 暁美……………(38)	



子ども時代と私(20) 一人ぼっちの僕……………三浦 武…(40)

保育者を目指す学生との関わりから見えてきたこと……………小倉 定枝…(45)

子育ての探究 その七

近世におけるわが子への関心の高まり……………柴崎 正行…(52)

三学期、ある日の保育から……………上坂元絵里…(59)

表紙絵／田中 千尋

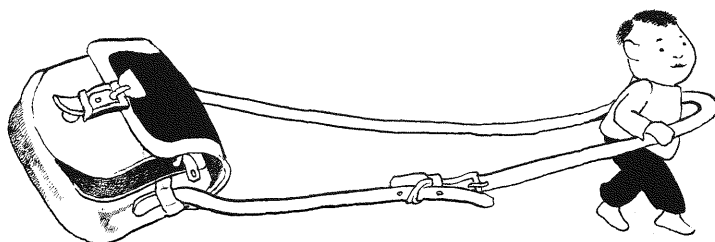
扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ

編集委員／田代 和美・田中三保子・高橋 陽子

編集部／仲 明子



からだからこころへの発信

―体ほぐしとダンス―

片岡 康子

「学校は子どもたちにとってのびのびと過ごせる楽しい場でなければならぬ。子どもたちが自分の興味・関心のあることにじっくり取り組めるゆとりがなければならぬ。また、分かりやすい授業が展開され、分らないことが自然に分らないといえ、学習につまずいたり、試行錯誤したりすることが当然のこととして受け入れられる学校でなければならぬ。さらに、

そのためには、その基盤として、子どもたちの好ましい人間関係や子どもたちと教師との信頼関係が確立し、学級の雰囲気も暖かく、子どもたちが安心して、自分の力を発揮できるような場でなければならない。」

〔「教育課程審議会のまとめ」より抜粋〕

右の一文を読んで、子どもだった頃の学校を懐かしく想いだす一方で、このような文章が書かれなければ

ならない学校の現実に胸を痛める人も多いと思います。教育課程審議会の審議（九八年六月）のまとめを受けて、二十一世紀の学校教育を検討した新学習指導要領が告示され（九八年十二月）、昨年、解説書も出版されました。

二十一世紀の学校はこの一文のような姿を取り戻せるのでしょうか。

執筆依頼を受けた事を機に、協力委員として関わった「体育」はどう変わろうとしているのかについて、体ほぐしとダンスを中心に述べさせて頂きたいと思えます。

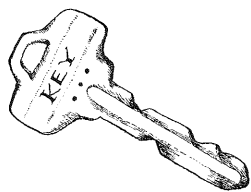
「体ほぐし」と「リズムダンス」の導入

体育に関する内容は「心と体をより一体としてとらえる」（人間の全体性をとらえる）という観点から見直しが行なわれました。体だけではなく、心と体という視点が打ち出された体育の改訂は今回が初めてのことでした。学習内容に関して特筆すべきことは三点あ

りますが、その二つが体ほぐしとダンスです。

すなわち第一点は、これまでの「体操」領域が「体づくり運動」という領域名称に改称されて、その内容の一つに新しく「体ほぐしの運動」（自分の体に気づき、体の調子を整え、体と心を解放して他者と交流する活動）が設けられたことです。からだにはいろいろな文字表記があり、それぞれに語義規定をして使い分けがなされておりますが、今回の学習指導要領では「体」が使われました。

第二点は、「ダンス」領域の内容に初めて、リズムダンス（中学・高校では「現代的なリズムのダンス」）が新しく導入されたことです。学習内容厳選という状況にあって、ダンスだけは、これまでまでの主内容、①表現・創作ダンス、②フォークダンスに加えて、③リズムダンスが導入されたのですから、ダンスへの期待の大きさが推し量られます。



リズムダンスは軽快なロックやヒップホップなどの現代的なリズムにのって、リズムのとり方や動きを工夫し、相手と自由に開わり合って踊るのが楽しいダンスです。どの時代にもつい踊りだしたくなる状況で自然発生する新しいダンスがあり、また、幼児が音楽ひとつで自然にリズムをとって踊りだす姿を見れば、リズムダンスは人間にとつて本来的な欲求に根ざしたものであることが分かります。リズムダンスはこうした時代の「今」の感覚と、踊りへの原初的なエネルギーに溢れたダンスであり、子どもにも身近に関心や欲求が高く、すでにダンス学習の導入をはじめ多くの場面で実践され、「体ほぐしの運動」との関連でも注目されています。

ダンス学習が他の運動領域と異なる特徴的な点は、①体と心のスイッチオン（心身解放）から始まる、②「みんなちがって、みんないい」、個の違い（個性）が生きる多様な学習内容と活動、③ゴールフリー的な学習―プロセス重視・体験重視の学習、④仲間との豊

かな開わり合い（交流）、などです。「体ほぐし」の新設は、ダンス授業の導入に行なわれていた数多くの実践が弾みになってのことからしても、「心と体をより一体としてとらえる」という今回の改訂の精神に合致する領域として、ダンスが再評価され、その可能性が見直されたということができます。

さらに第三点は、これまで「技能」と「態度」の二つの柱で構成されていた学習内容に「学び方」が加わり、自ら課題を設定して・考え・実行する力（生きる力）を育てよう、ということが推進されました。数年前から学習評価の観点は技能と態度に、関心・意欲、思考・判断が加わり、技能中心を脱却しつつありますが、その方向性が一層強まることになります。

今回の改訂は、頭ばかり使ってからだで体験・表現することが少ない、また人間同志の交流が少ない、といわれる今日の子どもたちの状況を考へてのことであり、子どもたちが、それぞれ一人の人間として、どのような生活の場を生きてそこに存在しているのか、そ

の生の根源に触れるという視座から学習をとらえなおすことでもあります。他者との交流の場である体育、まさに「からだで学び、からだで表現する」体育、今、その重要性はますます高まってきているといえましょう。特に「体ほぐしの運動」と「ダンス」は、言葉をこえて自他の存在を大切な命として重く受けとめることができるような体験の場を豊かに仕掛けることができます。「からだで学び、からだで表現する」、このことの重要性は高度なテクノロジ社会に入つて強く認識され、いま、すでに、国語や数学や理科でも成果を挙げている授業は少なくありませんが、本領を発揮する教科は体育だと思えます。

今の子どもたちが、からだで表現していくには、まず、からだの感覚を取り戻し、磨いていくための「体ほぐし」が大事になってきます。他者と触れ合いながら、からだをほぐすことによつて、からだが弾み、笑いがあふれ、しおれていた植物が水を注がれて生き返るように、みるみる元気になっていくのです。「体ほ

ぐし」は、モノが支配する時代とは異なつた、新しい時代をつくる人々を育てる教育の根幹でもあり、体育のあらゆる領域（例えば球技、陸上競技など）とも関連して行なわれる学習となります。

さらに、リズムにのつて他者と触れ合い、いろいろな人と関わつて踊る中で生きるパワーが漲ってくるリズムは、生活のいろいろな場に波及して交流の輪が広がるような（学校行事に際して、地域の祭りに参加して、老人ホームを訪問して踊るなど）学び方がなされると考えます。

癒しと蘇り

近年、様々なボディーワークが盛んに行なわれるようになっていますが、それらは肉体を鍛えることを目的とするのではなく、ストレスをためこみ、病気や慢性的症状に悲鳴をあげているからだの不自然な緊張を解き、悪い癖をのぞき、からだを自然に本来の機能を果たせるようにする（癒す）ことを目的にしています。

す。このようなボディワークは以下のように三つに大別できます。

ヒーリング（自己治癒）的なものは主に、健康の増進や自己治癒をはかるもので、物理的な肉体だけを問題にするのではなく、気と呼ばれるような生命エネルギーの流れを回復することが重要なポイントです。

セラピー（心理療法）的なものでは、からだに働きかけて心理的な問題の解決、すなわちトラウマ（精神的外傷）や条件づけの解除が試みられます。

メディテーション（瞑想）的なものには、古来から東洋を中心に存在してきたさまざまな修行法、究極的な心身の合一や宇宙意識の覚醒など、悟りにいたるための修行法が含まれます。

学校体育において「体ほぐし」や「ダンス」が注目を浴びる背景には、このようなボディワークがあります。これからの「体ほぐし」や「ダンス」においては、このような癒しのボディワークを視野に入れ、心身を解放し交流する特性を生かした活動内容と学び

の場を創りだしていくことが課題となります。その結果、癒されて終わりではなく、共に活動する魅力を築き上げて、創造的・積極的な心身の状態「蘇り」を生み出すことが可能になるでしょう。

好きなリズムやイメージに合わせて心のままにからだを動かしていく、手と手をつなぎ自他のからだに融れ合い、生きているからだのぬくもり、血の通ったからだを感じる、人と関わって踊るうちからだが弾み、高揚し、生きるパワーがみなぎってくる、自分を癒し、他人を癒し、共に喜び合い、共に蘇る、「体ほぐし」と「ダンス」はそのような場になっていくと思われれます。

「体ほぐしの運動」

次に「体ほぐしの運動」とは、どのような活動なのかを見てみましょう。

学習指導要領解説書では、次のような「行ない方」

の例が示されています。

①伸び伸びとした動作で用具などを用いた運動を行なう

②リズムにのった体操など心が弾むような動作で運動を行なう

③互いの体に気付き合うようペアードのストレッチングを行なう

④いろいろな動作などでウォーキングやジョギングを行なう

この他にも多様な方法が豊かに工夫できますが、次に、ダンスと関連した「体ほぐしの運動」の活動例を紹介してみましょう。

①身近な遊びを楽しもう

いろいろなジャンケン、だるまさんがころんだ、

目隠し鬼などの遊び

②力をぬいて動こう

マッサージ、重さをゆだねる、あやつり人形

③身近にある小道具を使って動いてみよう

新聞紙、タオル、風船、割り箸、布

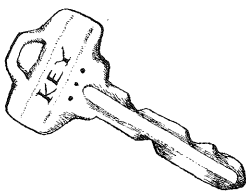
④体育館・校庭・自然などの環境探索

(目をつむって、あるいは目をあけて)

⑤コンタクトしよう

からだに触れる、体重をゆだねる・支える

体験した子どもたちは、例えば、触れるワーク（二人組で相手のからだに触れる）では、人の体の温かさ、触れられているときの温かさ、心地よさを感じた、共に生きている気がした、また目隠し歩きのワーク（一人が目隠しして、もう一人が手をつないでリードして歩く）では、初めて体験した地面の高低の恐さ、水道から流れる水に触れたときの感覚、頬に感じた空気や風の動きなどすべてが新鮮、本当にその人の身になるということの難しさを感じた、などの様々な感想が語られます。これらの感想から、ワークを通して、体で表現し合い・気



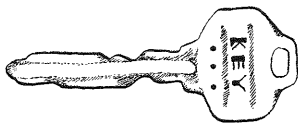
付き合う、ということに新鮮な驚きと心地よさを感じていることが分かります。

「体ほぐしの運動」はダンスとの接点を多くもっており、音楽にのって体に心地よい動きをする、人と交流しながらお互いの体に気付いていく、力のぬけた自由な体になって気分ものってくる、といった状況が導かれるような活動を工夫すると、子どもたちはいつのまにかダンスの世界に足を踏み入れているのです。

「体ほぐしの運動」は、当初、「心と体のほぐしの運動」という名称が適切と考えられたという経緯からしても、「からだからこころへの発信」、すなわち「体ほぐしから心ほぐしへ」、という運動です。また「体ほぐし」は、単純に「緊張」に対する「弛緩」という二元論的に対立概念でとらえるべきではなく、心ほぐし効果に留まらず、さらに集中して何事かをなすとげるとき「弛緩」（リラックス）した中での「緊張」という活動の状態を導きます方向軸を持つものであり、主体的な活動における自己コントロールを促進するよ

うに機能することが期待されています。

さて、示された指導要領をガイドラインとして、そこにどう関わっていくのか、それは私たち大人や教師自身の生き方そのもの問題になります。教師と子ども、子どもと子ども間にあるヒエラルキーを崩壊させ、学校という時空で、教師自身と子どもたちのそれぞれが抱えている生の光と闇をさらけだして新たに出会い共に生きる、という存在への深い洞察に関わってくるのです。生身のエネルギーをぶつけあい、委ねあい、支えあい、導きあい、生み出す（創造する）関係、「みんな、みんな、みんな、みんな、よい、よい、よい、よい」と、互いに慈しみ認め合う関係、すなわち同格の存在が調和しあい、分かち合う関係です。このような新たな関係性の中で、人間は、みんな同じく大きな力を発揮する存在であり、そこにいるだけで大きな価値を有する存在であることに、気づいていくと考えます。（お茶の水女子大学）



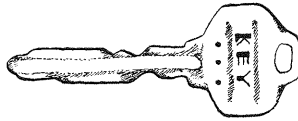
私が幼児教育を志した頃(7)

津守 真

昭和二十二年、二十三年頃の日本の社会

敗戦後二年を経た昭和二十二年の夏には、大学生生活は安定して軌道に乗ってきた。

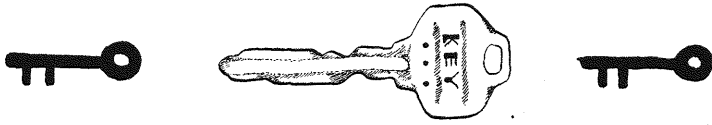
昭和二十一年九月には軍隊から復員した学生も含めて卒業式も行われた。私は南原総長が講演される式には欠かさずに出席した。当時は新聞紙上に南原総長の式辞の要約が掲載されるのが常であった。次にその演題を記しておこう。昭和二十一年九月卒業式「祖国を興すもの」、昭和二十三年三月卒業式「職業の倫理」、昭和二十三年九月「人間の使命」、昭和二十四年三月「平和の擁護者」である。私が卒業したのは昭和二十三年九月である。そのとき主題はシュヴァイツァーだった。教育基本法、学校教育法が公布されたのは昭和



二十二年三月であり、四月には学校教育の六三制が始まり、五月には新憲法が施行された。六月には片山哲による社会党内閣が成立した。昭和二十二年十二月には児童福祉法が公布された。他方、戦時中の言動による公職追放は財界、言論界にまで広がり、旧秩序に属する人達には大変な時代であった。私共学生にとっては、日本の社会は新しい方向に向かって前進しているという実感があつた。

高崎能樹先生「阿佐ヶ谷東教会幼稚園」

私は実験心理学の方法によつて子どもの方向定位と描画模写の研究をしていたが、身近な子どもだけでは不十分で、もつと多くの被験者が必要とした。高木貞二先生から山下俊郎先生への紹介状を持つて、私は愛育研究所を訪れた。戦後、愛育研究所の教養部長は岡部弥太郎先生から山下俊郎先生に代わっていた。その折りに山下先生は私にヴァンデウオーカー・N・C著『アメリカの教育における幼稚園』を見せてくださった。一九〇八年に出版されたその小さな書物には、十九世紀半ばからの米国の幼稚園の初期の歴史が記されていたが、どのようにして現代の幼稚園につながるのか、中間は空白だった。私は岡部先生からフレイベルを学び、フレイベルの幼稚園が米国で批判を受けたのは知っていたが、フレイベルの何が批判されたのか、何が進歩主義教育に継承されたのか、疑問のままだった。この書物は、後に私が米国に留学したときに暇をつくつては図書館にもぐり込んで古い雑誌を調べることになった端緒である。ずっと後に「フレイベル以後の幼稚園」の

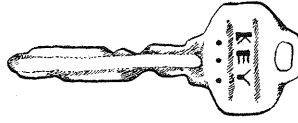


出版をすすめてくださったのは山下俊郎先生である。

山下先生は、私を阿佐ヶ谷東教会幼稚園の高崎能樹先生に紹介してくださった。昭和二十二年秋である。短めの黒い小倉のズボンをはいて丸顔の柔和な風貌の先生は既に頭が禿げておられた。小柄な奥様は戦時中のもんべ姿で、子どもたちの世話を焼いておられた。学生服の私を両手をひろげて笑顔で迎えてくださった。それから一年以上にわたって私はこの幼稚園に通うことになった。先生ご夫婦は、教育学を専攻しておられた一人息子の高崎毅さんの復員を待ち侘びておられた。

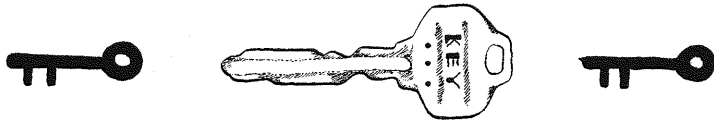
高崎能樹先生の幼稚園で私が与えられた部屋は二階の小さな部屋だった。ひとりずつ子どもに来てもらって立方体、円筒、円錐など、ボール紙で作った実物を見せながら描いてもらった。子どもたちは順番が来るのを待っていた。だいちゃんという名の三歳の男の子は、いつも私の傍らにくっついていて、主任の竹内先生は私の研究が進むようにといつも気を遣われた。

高崎先生の幼稚園では、朝の会集があった。広い遊戯室に園児全員が集まる。「おはなしの先生」としても有名な高崎先生のおはなしが面白かった。それが終わると、一組ずつ並んで各自の部屋にゆく。庭で遊ぶ時間もかなりあったが皆部屋に入ってしまうと園庭はがらんと静かだった。当時は子どもの数が溢れていたから、外で遊びたい子は外で、内で遊びたい子は室内で遊ぶようにすればよいのにと、私は疑問をもった。ある日、先生は「つもりくん、明日は朝のお話しをやってくれ給え」と言われた。私はその頃毎週日曜日



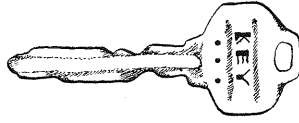
には今井館で午前は矢内原先生の聖書講義、午後は日曜学校をやっていたから、同じようにダビデの話をした。話しながら何か雰囲気違和感を感じた。話の途中で移動したり、しゃべったりする子どもがいるとクラスの先生から注意されるのである。それは話が子どもを引き付けるちからをもっていない証拠で、子どもに注意することではなく、話し手の力量不足の問題だと私は考えていた。また、それは話の始まり方にも関係があるかもしれない。朝の会集は全員が鐘の音で集められる。私の日曜学校の場合には、子どもと一緒に遊んでいて集まる時間を見計らうから、子どもの側に聞こうとする心の準備ができてい。私はこんなことも高崎先生と話したと思う。

高崎能樹先生は私にしばしばご自分の苦勞話をされた。戦争中、特高警察から睨まれた話になると先生の語調は激しくなった。先生はキリスト教の牧師で、天皇制に対する批判的な考えをもっておられ、説教にもそれはあらわれたのだろう。私服の特高警察が礼拝のときにも後部の座席にいたこと、幼稚園でも毎朝宮城遙拝をするようにいわれても絶対に承知しなかったことなど憤慨をもって語られた。高崎能樹先生は中学生の頃には不良少年で、「さらし」の腹巻きに短刀を挟んで肩で風を切って歩いていた。その短刀を相手の眼前で床に突き立てて喧嘩したという。キリスト教に出会ってから、短刀を捨てて、だれが見ても穏やかな人になったのだが、その激しい気性をもって軍の指導に対して反骨を示した。「おはなしのおじさん」でもあった先生の話は真に迫っていたが、書き留めておかなかったのをいまになって残念に思う。



先生は当時『子供の教養』という幼児教育の小さな雑誌を発行しておられ、母の講座を開いておられた。小林恵子「母のための教育雑誌『子供の教養』について」（国立音楽大学研究紀要一九九二、一九九二）によれば、『子供の教養』誌は昭和四年に武南高志によって創刊され、昭和十七年に休刊、昭和二十二年に高崎能樹によって再刊されて昭和二十八年まで続いた。高崎先生はこの雑誌の創刊以来、その編集にかかわっていた。昭和十七年に紙の配給停止という理由で廃刊になったが、実際は軍部の反感を買ったためだったという。

これに対して同じ時期に発行されていた倉橋惣三主幹の『幼児の教育』誌、つまり本誌は、昭和十九年十月号まで紙の配給を受けつづけ、昭和二十一年十月に復刊になるまで二年間休刊となったが、それは戦争末期の空襲と、戦後直後の物資不足によるもので、この雑誌が軍部の批判の対象となったことはなかった。このようなことから、戦後になって、倉橋の戦時中の言動が批判されたことがあった。戦争中の日本の社会の空気を考えれば、容易な批判はできない。戦時中に軍を批判することは命懸けのことだった。高崎能樹はそれを覚悟で批判した。倉橋には、守らねばならないものがあつた。フレibelが説き、米国の進歩主義教育が主張したこと、幼稚園を幼児の遊ぶ場とするためには、あらゆることに辛抱を重ねなければならぬ、ある点では周囲と妥協もせねばならないという倉橋の決意によるものだったと私は思っている。倉橋は遊びを中心とする幼児の生活の流れを東京女高師付属幼稚園で守り通した。そのために昭和二十一年三月に来日した米国教育使節団

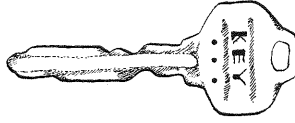


は、小学校以上の教育には厳しい批判をしたにも拘わらず、女高師付属幼稚園を訪れたときにはきわめて好意的な観察をし、「日本の幼稚園は米国のそれとあまり違いはありません」〔『幼児の教育』四十五巻一号〕と報告している。倉橋は昭和二十一年に教育刷新委員会の委員となり、南原繁、森戸辰男、務台理作らと共に教育基本法の原案作りに挺身寄与された。

各地の幼稚園

昭和二十二秋、東京女子高等師範学校教授だった波多野完治先生が学生を幼稚園に連れて行かれるという話を聞き、現場訪問のときだけ私はその授業にまぎれこんだ。上沢謙二先生の幼稚園は茨城県の鹿島にあった。先生の書かれた子どものためのおはなしの本を私は数冊読んでいた。田舎の老翁という姿の先生と奥様が迎えてくださり、お茶とお菓子を御馳走になった。そのころは「おはなし」のおじさんが、子ども好きの家族とやっている小さな幼稚園があちこちにあった。上沢先生の幼稚園はそういう園だった。

田無の自由学園を訪れたときは、羽仁もと子、羽仁吉一夫婦が玄関まで迎えに出て下さった。昭和のはじめ、私が子どもだった頃、母は羽仁もと子の『婦人之友』誌の愛読者で、その付録の「歯磨き」や「お手伝い」の目録表に、出来た日はマルをつけ出来なかつた日はバツをつける、「甲子」「上太郎」という躰の評価表を母は好んでいた。勿論それは三日と続かなかつたのだが。私共が訪問した日、すでに老年の和服姿の羽仁もと子が多く



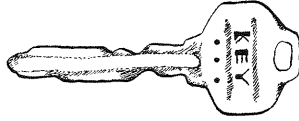
話され、大柄なご主人が控えめに傍らにおられた。ご主人がこの仕事を支えてこられたことがすぐに分かった。当時の通念と少しく違った夫婦の並び方に私は印象づけられた。

お茶の水女子大学付属幼稚園も、波多野完治先生に連れて行って頂いたのが最初である。そのときのことを思い出そうとしても、その後始終出入りするようになったときの記憶と重なって、どこまでが最初の記憶に属するのか判然としない。ただ、最初の訪問のときから、庭の砂場に熱中する子どもたち、積み木で遊ぶ子どもたちなどを見て、ここに私自身が幼いときから知っている子どもの姿があると思った。それは私はずっと心の中に描いて来た幼稚園の風景に合致した。

この頃の日記より

昭和二十三年四月十一日 素直な美しい子どもたち、私がかれらの前にあって何をなすことができよう。かれらの方が私よりも美しく純真なこと幾層倍であろう。「徒に巷に声を挙げることをやめよう。傷める葦を折ることなく、仄暗き灯心を消すことなく」(イザヤ書42章)、いや、それ以上に、幼な子のか弱く美しい葦を折ることなく、透き通った純な心を濁すことのないようにしたい。

昭和二十三年四月三十日 私の実験は全くひっくりかえってしまった。いま、灰を被って伏している。私は子どものために何をなすことができるのだろうか。私の志は風の前の灯火のように揺らいでいる。私の心は林の木のように騒いでいる。この研究



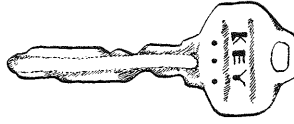
愛育研究所
— 戦争の余燼 —

で私は失敗しようとも、子どものために何かすることがあるのではないか。私のやり方が誤っていたただけだ。私は小さなひとりの人間として子どもを育てる道を研究する。卒業論文は、現在まで私が歩んできた心理学と私の理想との交差点にほかならない。

昭和二十三年、私は相変わらず日比谷のCIE図書館でゲゼルの書物を読んでノートをとっていた。当時、私はまだ実際の乳児にふれたことがなかったので、山下俊郎先生に願って、愛育研究所の乳児室に入入りすることになった。先生は直ちに病院長の斎藤文雄先生と小児科の平井信義さんに紹介してくださいました。私は多くの時間を新生児室と乳児室で過ごしたのだが、その頃のことを考えると、赤ん坊の外見は見ていたが、それ以上のことを見ていなかったことを思う。

戦後の愛育研究所は、宮内省からの御下賜金を打ち切られ、研究者は他で生活の資を得て、手弁当で集まってきた。私共の大先輩であり、幼児文化の先駆的研究をされた竹田俊雄先生の家は空襲で焼けた後、先生は三階の研究室の一隅を衝立で仕切って寝起きしておられた。黒いモーニング一着で通された。いまでは考えられないことだが、この時代の児童研究者たちの苦勞を私共は忘れないでいたい。

愛育研究所には創立当初から、三木安正「異常児保育室」があり、戦時中閉鎖されてい



て、その部屋は幼稚園になっていた。幼稚園の先生のYさんは東京女高師の保母養成科の卒業生で、私に倉橋先生の本を読んだことがあるかと尋ねた。私が知らないと言うと、Yさんは、幼児の研究をする人が倉橋先生を知らないのは恥ではありませんかと言って、『幼稚園雑草』を私に下さった。大正十五年初版のその本の奥付には昭和二十三年七月十五日発行と記され、巻頭に著書による「新版の序」が「幼稚園令に代わって、幼稚園が学校教育法中に制定せられて一周年。東京女子高等師範学校付属幼稚園にて昭和二十三年四月 著者」と書かれている。黄色いザラ紙印刷で、私のその古い本はいまは頁がバラバラにはつれてしまった。これが私が読んだ倉橋惣三の最初の書物である。

「我等の途」という最初の頁から私は魅せられてしまった。これまでに学んだどんな心理学の本よりもこの著者は子どもがよく分かっていると思った。倉橋惣三が心理学の先輩であることを知って、尚更に心強く思った。この中に「お茶の水幼稚園の焼跡に立ちて」という文章がある。これは勿論関東大震災のことであるが、私には第二次世界大戦と重なった。「くづれた煉瓦と、うづ高い灰と、焦げた木材の破片との中に、土台の礎石だけが整然と残っている。……ほんとうに何もなかった。ただ僅かに見出し得たものは、幾つかの陶器製の白い人形の首だけであった。私は、ぞつとする様な心持ちでそれを拾ひとらうともしなかった。そして、空しく、灰の中にステッキを立てて佇立しながら、……」という叙述は当時まだ私共の周囲に見慣れた風景であり、これ以上の悲惨が戦争の現実であった。

保育の見直し — その一 —

加藤 いづみ

あたりまえの保育への疑問

一九七〇年代後半の頃、若い保育者から、「幼稚園の保育ってこれでいいのかしら？」という素朴な疑問がありました。

毎朝の朝礼、「天国と地獄」のレコードをかけて子どもを機械的に整列させ、「お片づけの歌」をピアノ

でジャンジャン鳴らして子どもに片づけを促す保育……、子どもを保育室に集めて、保育者が製作や歌などを一方的に教える保育……など、当たり前のようにやり続けられてきた保育で、本当に子どもは育つの？という疑問がふくれあがっていきました。

その頃の事をM先生は、「運動会の前になると、登園後すぐ園庭に集まってプラカードの前に整列し、行

進の曲がかかると入場行進の練習をしていました。先生全員が笛を持っていて、子どもをきびきびとうごかすために、笛でぴっぴと号令をしていたんですよ。次は体操の練習をして、その後は「花笠おどり」の練習をして……と、くる日もくる日も同じ練習がつづきます。そんなある日、一人の子が滑り台の方に向かってしまいました。早く呼びもどさなくっちゃ、と思っていたのに、その子があんまり嬉しそうに滑っていて、何も言えなくなっていました。練習をしない子が問題児なのか？ それとも、はみださざるを得ない保育に問題があるのか？ ということを感じ、どうしてもつれもどせなかつた」と語っています。

やがて、若い保育者たちの声に共感する輪は少しずつ園全体に広がり、職員全体で、行事中心・保育者主導の保育への疑問が話し合われるようになりました。そして職員の話し合いも初めは日々の保育や行事の打ち合わせが主だったのが、「自分たちの保育」について各自の意見を交わす事が増え、その後の「子ども理

解」のための園内研修につながっていきました。

子ども主体の保育を探して

しかし、今の保育への疑問は限りなく広がっていくものの、では、どうしたら良いのかということについては皆目見当がつかないという状態でした。とにかく自分達だけではどうにもならず、藁をもつかみたい思いでした。

それが、お茶の水女子大学「幼児教育現職研究」への参加の引き金になり、一九七七年四月から全職員で、毎週火曜日の保育後に横浜から東京へ研修に出掛けていきました。

チューターの先生や大ベテランの先生の話から知的



な刺激を総身に及び、自分たちの疑問を先生方に次々と質問していき、新しい保育への思いをあらたに募らせました。

そして、この現職研究会で聞いた理想の保育の在り方と、自分の毎日の保育との隔たりに圧倒されながらも、職員が一丸となった本格的な保育の見直しが始まったのです。

子ども主体の保育のはじまり

― 保育環境を変える・保育が変わる

そして翌年一九七八年から、現職研で園のチューターをしてくださった大戸美也子先生をスーパーバイザーに迎えました。大戸先生の指導のもとに、いよいよ、聞いたり見たりしてきた子ども主体の保育を自分たちで実際にすすめることになりました。

保育室の大半を占めていた机の半分が除去され、遊具が増やされました。積み木、ブロックなどの室内遊具を購入し、ままごとコーナーの充実をはかり、廃物

製作のコーナーも新たに作りました。そして、特別の場合を除いて一斉活動をなくし、それまで一斉活動の前の三十分だけだった遊びの時間を大幅にのばし、子どもの遊びの空間と時間が大きく変化しました。

そして、やや肥大化した諸行事も思い切って縮小化することにしました。たとえば、保護者に見せることを主体に考えられていた運動会から、まず第一に子どもが楽しむことを主体にした運動会に改善。学年ごとに大きなテーマに基づいて行なわれてきた作品展も生活展という名称に改め、内容も一人一人の子どもの日常の作品を展示し、また“作品”という形で伝えるにいく成長の姿は写真で展示することにしました。

行事が縮小されることで、子どもたちはそれまで行事のために歪められていた生活から少しずつ解放され、じっくり遊びに取り組めるようになり、保育者もそれまで行事の準備に追われていた時間を、子どもたちのよりよい成長のために考え合うことに費やせるようになりました。

この時期、保育者たちは、とにかく子どもと遊ぼうという意気込みで無我夢中でした。気づいたら保育者を中心になってその周りを大勢の子どもが取り巻いて、よく大戸先生から「だんご保育だね」と笑われたこともありました。また、子どもの要求を受け入れすぎてしまつて、保育者が子どもに振り回されていたりということもしばしばでした。

けれども、子どもとの密着した生活の中からは、これまで気づかなかつた子どもたちの姿を新たに発見することができました。「子どもは自ら育つ力を持っている」ことや「子どもの力を信じる」という言葉を実感し、子どもの自発的な活動の中に、色々な工夫があることがみえてくると共に、改めて遊びのとらえ方の難しさを痛感していきました。

遊びには筋がある

―園内研修の始まり

大戸先生を迎えて始まつた定期的な園内研修では、

『子どもの遊びへの理解』を深めることがテーマになりました。そこで、今までの形式的な保育記録を改め、保育者はそれぞれ自分のクラスの子どもの遊びの経過を「保育実践記録」に記録していくことになりました。そして、毎日書きためた記録は、遊び別に整理していきました。

自分たちの見たものや、発見したものを記録に残し、それを定期的に読み返し研修していく中で、私たちは日々子どもたちが展開している何気ない活動が「単なる遊び」では片づけられない豊かな内容を持っていることを知り、一つ一つの発見が驚きと興奮に満ちたものになっていきました。

記録は当初、廃物製作・積み木といった目に見えやすい活動がほとんどでしたが、少しずつ「一見混沌と見える遊び」にも目がむくようになっていきました。一例として「追いつ追われつ活動」の研修をあげておきます。

「追いつ」「追われつ」活動

子ども達が走り回っている姿は、園のあちこちらで見かける光景です。追い掛けては捕まえ、また逃げる……といった単純なあそびに注目したのは、四歳児の「ドラキュラあそび」の記録からでした。ドラキュラになった子が保育者を追い掛け、まわりの子もまきこみながら、遊びつづけた活動です。

血を吸おうと、おそいかかってくるドラキュラ役の子ども。

ドラキュラをやっつけようと毒ケーキ作戦を必死に考える保育者。

どんどん仲間を増やしていくドラキュラ軍団。

追いつめられて、とうとう逃げ場を失って血を吸われてしまう保育者……



この記録をもとにして研修を進めるうちに、追いつ追われつのやりとりが、単なる身体的運動ではなく、「追う」「追われる」という二つの役割をとりあう「対話」の原理の働いている、一つのまとまりを持った活動であることがわかったのです。

ただ走り回っているようにみえる行動も詳しく見ると、そこには一定の構造のようなものが見えてきます。『大人にとつてわかりにくい遊びにも意味がある』その発見は、保育者の遊びを見る眼を大きく変えていきました。

大戸先生との研修会を通して、「あそびには筋がある」ことや、「毎日同じ事をしてあそんでいる」ように見えても日々新しい変化があることなど、子どもの

行動からいろいろなメッセージを読み取ることができるようになってきました(注)。

子ども主体の保育の充実にむけて

八十年代は、記録を通して子どもの理解の園内研修活動を軌道に乗せていくと共に、それまで慣例化していたものを新たに見直し、環境整備を次々と行なっていきました。

・教材の設定の見直し―クレヨンなどの個人持ちの教材を共用にし(一九八四年)共同で使う中の育ちを大切にす。

・制服の廃止―園のシンボルでもあった「制服」「制帽」「外あそび用の赤白帽」を一九八九年より廃止し、自由な服装にする。

・環境整備―三歳児保育室、どろんこ広場の新設。外あそび用の大きい砂場の増設。アスレチックの設置など、あそび環境の整備をおこなう。

人間関係を育む保育をめざして

九十年代になり、社会の大きな変化と共に、幼稚園に入園してくる子どもの行動に変化がみられるようになってきました。たとえば、「他の子が近づくだけでぶつ」「友達に話し掛けられても、無表情で何も答えない」「相手の子が泣いていてもたたき続ける」というように、人との付き合い方が希薄な子どもたちが増え、保育者は子どもとのかかわり方にとまどいつつ、試行錯誤を重ね、新たな保育の見直しが始まりました。

そこで、一九九一年から四年にわたって、子どもがどのように友達に近づき交わりあうのかを、具体的な子どもの様子を一つ一つ振り返り記録し、その実態を捉えるための園内研修を行いました。その結果、園における子ども達の人間関係のスタイルには、次の五種四十四タイプあることがわかりました。

①「存在」 ひとりで砂で遊ぶ等、子どもが集団状況

にひとりでいる状態（八タイプ）。

②「発見」 ままごとのそばで友達をじつと見る等の、子どもが自分の周辺に関心を持って観察している状態（五タイプ）。

③「接近」 保育者が何か始めるとそばにきて見ている等の、子どもが関心を持った周辺の事象に近寄る行動（三タイプ）。

④「参入」 「追いかけてっこをしている子のおしりをポンとたたき逃げる」等の、子どもの人との関わりはじめ（七タイプ）。

⑤「仲間遊び」 他者との参入を経て、仲間遊びを展開している状態（十一タイプ）。

この研修を通して、子どもたちの多様な人とのかわり方を発見したことで、それぞれの子どもの人間関係の発達にそった援助を、意識的に考えていけるようになりました。

今まで見過ごしがちだった「人との関わりはじめの

子どもの様々な様子」を知ったことで、それまで人との関わりがスムーズにできない子に「仲間に入れてっ

て言えばいいのよ」という儀礼的な言葉に頼り、パターン化していた保育者の援助を反省することができました。また、同じ物を身につけたり、同じ行動をとるといふように、単なるまねっことして受けとめていた行為が、仲間との関わりにつながっていたことや、「うちに遊びにきていいよ」「手伝ってあげようか？」というように相手の気持ちを和らげる言動もスムーズに仲間遊びにかかわるための力になっていくこと等も知り、保育者の関わりを多様化していくことが子ども一人一人の実態に即した援助につながることを考えさせられました。

二十年の園内研修を振り返って

「子ども主体の保育」をめざしてすすめてきた園内研修。初めの十年は保育を一八〇度転換するという大改革だったと言えます。従って周囲、特に保護者からの

理解を得るまでには、大変な苦労があったことをつけ加えておきます。

子どもを理解し育んでいくための研修は、私たち保育者自身の物の見方、考え方の根本をも育てていくてくれた事を感じます。二〇〇〇年という世紀の節目を迎えている今、子どもをとりまく生活もまた大きく変化してきています。その時代の流れの中で、継承していかねばならないことと共に、新たな保育の見直しも求められてきています。今回は、社会状況が激変していった九十年代の保育の変遷を中心にお話ししていきたいと思います。(横浜学園付属元町幼稚園)

注

この時期に研修をした遊び 廃物製作・追いつ追われつ・積み木・ままごと等

日本保育学会にて研究発表

一九八一年第三十四回大会「追いつ追われつ活動の構造に関

する研究」「4才児の積み木遊びの構造に関する研究」

一九八二年第三十五回大会「保育における交互作用の研究

その1 研究の意義」「同その2 研究資料としての観察法

の提案」「同その3 追いつ追われつ活動の場合」「同その

4 こっこあそびの場合」「同その5 片付けの場合」

一九八三年第三十六回大会「4才児の動物遊びの生態」「ガ

ンダムごっこに関する研究Ⅰ」「ガンダムごっこに関する

研究Ⅱ」

三十六回大会において、日本保育学会倉橋賞受賞

参考文献

『保育の見直し』 大戸美也子／横浜学園付属元町幼稚園

フレーベル館

『保育ライブシリーズ No.4 横浜学園付属元町幼稚園の40年』

大戸美也子／横浜学園付属元町幼稚園

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(4)

―生涯発達の“ふるさと”として―

金田 利子

はじめに

信頼のいずみ・発達のふるさと

一番信頼できる人間関係のかたまり、
それが家庭の他にもう一つありました。
そのかたまり、それは外見はとっても

小さいけれど、

そのあたたかさは世界一。

これから一生をどう生きていこうか

その出発点になる

人間信頼のいずみ、人間発達のふるさと

ここがあるのでこわくない。

ここがあるのでみんなの中で自分らしく

ずとずと輝いていける。

これがみんなの〇〇園、

さあ、飛び立とう小学校へ

そして大きな大きな自分自身の人生へ。

右の詩は、筆者が、日頃交流しているある幼稚園（あおぞらキンダーガーデン）の卒園時に子どもたちとその父母へのメッセージとして創り、贈ったものである。この視点が、まさにこの連載の今回の主題になる。

その第一回には基調を、二回、三回目には地域という空間（ヨコ）的支援について取り上げたのに対して、今回は、発達という時間（タテ）的方向への「ふるさと」としての子育て支援について取り上げる。

ここに載せる事例は、筆者のかかわる静岡市内の幼稚園・保育園から寄せて頂いたものであるが、全国各地できつと同じような実践が多々あることと思う。

ここでは、そうした数多な取り組みの一つとして身

近な例を紹介しながら、生涯発達を支える保育の役割について読者の方々とともに考え合う契機としたい。

卒園生と園との交流―心の原点の再体験―

次は、自主的に幼稚園をつくり開園六年目の、あおぞらキンダーガーデンのエピソードから、実践家で主任保育者の岡村由紀子さんに右の小見出しの姿をまとめて頂いたものである。

〔事例Ⅰ〕 私の園では、毎年八月、年に一度卒園生が集まって一泊二日の旅行をします。呼掛けは園がしますが参加は自由で一年生から六年生まで、タテにもつながる子どもたちと、保育者が一緒に行く旅行です。

昨年（八月のことです）（この年は子ども三十五人と保育者全員〇五人の参加でした）。夜の交流会で学年ごとの出し物をやることになりました。

二年生は寸劇を創作。参加者のなかに発達のゆつくりな子（ひろきくん）がいますが、その子もいれて考

えたストーリーは、「いもむしがさなぎになり葉っぱを食べ大きくなって蛾になる」というものでした。

いもむしくんは寝袋の中、ひろきくんは、さなぎが食べる「葉っぱ」役、「だって、ヒラヒラしているでしょ。だからヒラヒラしている葉っぱにするというのです（本当にひろちゃんはずっとしていられなくてヒラヒラと自由に動いているイメージにぴったり）。ナレーターも入っていて、五分ほどの寸劇でした。

久しぶりに集まった子どもたちが短時間にみんなの違いを生かして劇をつくる力に感動したのですが、婦りの列車のなかでお漏らしをした男の子のおしっこを自分の紙で一生懸命一緒に拭く様子が見られました。

こうした姿にあまりに心を動かされたので、そのことをお便りにして父母の方にお知らせしました。

すると、次のような感想が寄せられました。

「子どもたちの学校を取り巻く状況は厳しく、そんなことは考えられない」「旅行にいったら、もう絶対今度もいく、楽しかった」と言っている」「帰って

きたら、いままで人に手紙など書いたことのなかったのに、先生にどうしても来年もいきたいという手紙を出す」と言っている」「戻ってきたら、おだやかな感じになった」等々。

この旅行は雨が降り、バーベキューもできないし、大井川上流のため水が冷たく川遊びもほんの少ししかできないし……というように、大人からすれば、十分とはいえない状況だったのです。しかし子どもたちには、そんなことより、「仲間という」という、そのことが何より楽しいのだと改めて思ったものでした。

〔事例2〕へ……略……。私は幼稚園にきてとてもたのしかったし、小学生になって忘れてしまっていたことも思い出しました。だから、みんなに「ありがとう」の気持ちを込めて「クッキー」をつくったよ。

……今度いくときまで私のことおぼえていてね。……本当にたのしかったよ。ありがとう。……

私たちの園では、卒園生が園に遊びにきたとき感想を書いてもらうノートを用意しています。右の文は、

その中の一つで、六年生のなつみちゃんのものです。

なつちゃんは、六年になってから一番仲のよかった友達が「いじめ」にあい不登校になってしまい、そのため気持ちが悪くならず、家でイライラしたり反抗することが多くなり、家の人も悩んでいて、そのことを電話で私たちに相談されました。その時、おかあさんに「一度幼稚園に遊びにきたら」と、声をかけておいたのですが、なつちゃん本人が「幼稚園にいつてみようかな」とおかあさんに話したということで、実際七月の夏期保育に参加しました。

そのおわりに、前述のようにノートに書いていきました。その後もなつちゃんが休みの日には園に遊びにきています。家でなのなつちゃんは、園にくるようになって、妹への接し方がやさしくなり、自分でよく考えるようになり、今は「将来あおぞら（この幼稚園）の先生になりたい」と言っている（中学校の面接で「とても尊敬できる先生だから」と話した）と聞きました。

〔まとめ〕 卒園生が集まったり、園に遊びにくることは、自分らしくいられる、受け入れてもらったなど、小さい頃の心の原点を、体で感性として再体験することではないでしょうか。それが今の自分を見つめること、これから自分が生きていく力にもつながっていくような気がします。

思春期のゆれを支える心の拠り所として

— 丁子さんとのかわりから —

次は、赤ちゃんのときからの保育園を、思春期の峠で揺れるときに思い出し、園が一緒にその峠を越える支えになつてきた事例である。

それは、昨年十月二月に園が生まれて無認可時代から三十



周年、認可園になって二十周年を迎えた、静岡市のたんぼ保育園の事例である。その祝賀会でT子さんがあいさつされ、涙声で“たんぼ”に支えられた感謝の思いを語った。筆者もそこに参列しており、前々から思ってきた、思春期を支える保育園・幼稚園の役割の事例の一つを実感することができた。そこで、一年までの園長先生・木野久恵さんにT子さんとのかわりについてまとめて頂いた。

〔事例3〕 保育園の時は、ウサギを可愛がり、みんなからも好かれるやさしい子で、卒園時、ウサギがT子さんの家にもらわれ大事にされて長生きしたとのことです。

小学生時代にはあまり交流が無かったのですが、二の時不登校で「非行」的になり、同級の友達が心配して、保育園にもそのことが伝わってきました。同級の親たちも、「放っておけない。他人ごとではない」と心配し、私が呼掛けて集まりをもち、T子さんのお母さんとともに何度か話し合いの場をもちました。

その時の母の悩みは深刻な状況で、かなり老けてしまった様子もあり、できるかぎりの手を尽くそうと、園と交流のある中学校の先生に入ってもらい、「思春期の子どもの様子、内面、親とのかかわりを考え合う会」をつくりました。母にとって、親・兄弟にも言えない悩みを「たんぼ」では言えると、子どもの状況や胸の中につまる思いを出す場になっていたようです。

母は、相談所、校長、生活指導の先生、友達とも相談しながら、本人に対応したが、「“非行”なまといるときが一番いい」と家にも帰らず、母は毎晩わが子を探し疲労困憊し、ついに施設（教護院―一九九八年より“児童自立支援施設”）に入り、中学校の卒業証書は校長先生から施設でもらったようでした。

施設では、きちんと生活し寮母さんから信頼されるようになり、外に常にかかわってくれて信頼できる大人（親以外の）がいて、その人が責任をもってくれるなら、退所してもいいということになりました。

そこで、T子さんが選んだのがたんぼ保育園でした。私は何度か、寮母さんと手紙を交換し、本人にも手紙を書き、職員の同意を得て、保育園として受け入れることにしました。

卒園時担任だった先生が自分の子どものように一生懸命悩みを聴き、毎日話をしていたのですが、最初は来たりこなかったり、毎日母と連絡を取り、「受け入れて待とう」という忍耐の日々でした。

園では、おやつづくり、おもちゃの手づくり、部屋の飾り付けなど、お手伝いをしていました。子どもたちからは「おねえちゃん、おねえちゃん」と慕われ職員も「明日も待ってるよ」と励まし続けてきました。

こうして、およそ一年、収入としては夕方の保育のみアルバイト料を払うという形で過ごしてきた頃、本人の方から、アルバイトを見付けて働きたいと申し出てきました。もう、社会にでも大丈夫、その方向を励まし、ピザの店で働き、ときどき顔をみせてくれていました。それから数年、今では、バイトではなくカラオ

ケボックスのチーフとして生き生きと働いています。

ここ数年は会っていませんでしたが、三十周年の案内をみてやってきてくれました。同時に開催された大同窓会では、マイクを渡されましたが、言葉にならず涙、涙で、「大好きなたんぼ、大好きな先生、卒園して、十年以上経ったときにも、忘れずに揺れているときに声をかけてくれたことがどんなに嬉しかった……等々」が伝わってきました。

この言葉や姿から、T子さんにとって「たんぼ」は、心の拠り所になっていたのだと、みんなも励まされましたし、私もとても嬉しかったのです。

自立への支援

— 障害を受けとめ乗りこえつつ —

これは、静岡市で一番早く産休明けからの保育園として認可されたこぐま保育園での事例である。ここでは、障害のある卒園生が給食室でボランティアをしていると聞き、園長の越膳明子さんにまとめて頂いた。

〔事例4〕 昨年春、単位制の総合高校（通信制）の一年生になったYちゃんがやってきました。

Yちゃんは、難聴でかなり聞こえにくいのです。中学生生活はとても大変でほとんど学校に通えませんでした。親子で悩み、高校に進学した直後、お母さんから相談がありました。「昼間は家で勉強、週に二回学校にいくという生活では行動範囲も狭くなるし心配。いろいろ話す中で、こぐま保育園で何かできることがあるかなということになり……、こぐま保育園なら行ってみたい、何か手伝いたい、ということになった」とのことでした。お母さんとしては、「何でもいいので……」という切実な思いでおられたようでした。

私は、Yちゃん自身の気持ちをちゃんと聞きたい、本人がその思いを伝えてくれることから自立への一歩が始まると思い、久しぶりに会って話すことになりました。「小さい子どもと接したい、他にも何かできることがあったら何でも……」ときちんと話すことができるYちゃんに接し、受けとめる必要があると感じま

した。職員にも提案し、未成年でもあることから、あくまでボランティアであることを確認し、現在まで、給食室の食器洗いと三歳児のおやつの後片付けなどを手伝っています。

Yちゃんは、雨の日も風の日もほとんど休むことなく、時間どおりにやってきました。自転車で三十分位の距離、午後一前に息を切らして、まっかなホッペで飛び込んでくる彼女は、まだあどけなさの残る十六歳です。三歳児は、「Yお姉ちゃん！」と親しみ、給食室ではとてもあてになる存在です。

このことを通して考えさせられたことがたくさんありました。中でも、若い職員たちが妹のように可愛がり給食室では、「明日は教科書をもっておいでよ」と勉強の手助けなど、目の回るような忙しさの中で、自然な形で受け入れている姿に感動しています。

年が明けて、一月の下旬、Yちゃんが職員室にやってきました。心配そうな声での話は、来年度のことでした。「四月からも、この生活を変えたくない」と言

います。真の自立は、この保育園からもう一度巣立つことなのだと思います。それにはもう少し時間が必要なのだろうと考え「そうだね。四月からも今みたいにしてよね。Ｙちゃんがいてくれて、本当に助かっているんだよ……」と話したことでした。

高校生の人権意識への育ちを支える

―意見表明への思いを受けとめて―

幼稚園・保育園では思春期を見通した子育てが、今一つの課題になってきている。

静岡市・清水市を中心に中学・高校生が、「THINK OF EARTH」というグループをつくり、子どもの権利条約を学び、自分たちの権利って？ と考え、みんなで生の声を集める活動をしている。一昨年夏九八〇人もの意見表明をジュネーブの国連子どもの権利委員会まで悪戦苦闘して届けに行ったりもしてきた。

この会は子どもが中心であるが、あくまで黒子として、会を支える大人たちがいる。

その中には保育関係者も加わっている。この活動は幼稚園・保育園の独自の活動ではなく、青少年の主体的な人権意識を育てようと願う多くの層の人たちの一員として保育関係者が加わっていくものである。先にあげたたんぼ保育園の元園長の木野久恵さんもその一人。以下は筆者が木野先生から伺った事例である。

〔事例５〕先生のところへは、権利意識に目覚めた高校生になった卒園生が、よく「聞いて聞いて」とやってくる。たとえば、四月の新学期、卒園生のある女子高校生の場合、朝いくら探しても制服用のネクタイがない。それもそのはず、自分のものとまちがえて父親のタンスにいつてしまっていた。それとは知らず父親は、「ネクタイ一つより遅刻しない方が大事だ」とアドバイス



し、本人もそう思い、ノーネクタイで、急いで登校。その日学校では、そんな事情は聞かず、服装の「規則違反」の生徒たちを、みんなの通る廊下に座らせたという。その日も、憤慨しながら飛び込んできた。

その子は、「THINK OF EARTH」の中心メンバーであり、理不尽な「指導」への怒りとともに、「子ども」の権利条約を学んでいながら意見表明できなかった自分への悔しさ」にもいらだち、その思いを信頼する大人に聞いてほしかったようだ。園長先生は聞き役に回る。すると、子ども自身のなかに、自分はどういう行動をとるのがよいか、仲間と共に考えていく勇氣と前向きな姿勢がよみがえってくるという。

おわりに―生涯発達のおふるさととして

老若男女共同参画型社会の子育て、つまりこれからの子育ての支援を考えると、乳幼児がやがて少年・少女に、そして思春期を経て大人になる、さらにはやがて高齢期を生きる人になるというタテの系の出発点

として、乳幼児期の子育てを考えることが大切だと思える。それ故、保育の場は「生涯発達」のおふるさとといえる。この視点は、あたたかく育てられた子どもは、やがてあたたかく育てる大人になる可能性が高いと考えるとき、人間と人間の信頼の発展的な循環関係をつくりだしていく、人類史につながるタテの発展への契機となろう。このつながりにおいて、「信頼のいずみ」と「発達のおふるさと」は不可分に結合しているものである。その循環がもうまく進んでこなかったときには、前にあげた事例にも見られるが、思春期・青年期に仕切りなおすことが可能になり得る。そこにも幼児期と思春期の関係をつなぐ支えの意味が見いだせる。

カナダの絵本に、Robert Munsch (文)、Sheila McGraw (絵) の作品「LOVE YOU FOREVER」(Afinely Book) というものがある。最近出された日本語訳のものは、「母の想いを伝える暖かい涙の感動の絵本」として売出し、絵の再画もその視点になっているが、原作での「永遠」の意図は、単なる母の愛では

なく、「母から息子へ、息子からそのまた娘へ」という男女で共に担う人生の愛のライフサイクルの永遠がテーマになっている（と筆者は解釈している）。これは、まさに「人類史につながるタテの発展」を象徴しているといえる。

こうした、信頼の基礎は、世紀の転換期に日本がめざしている「競争社会」では育ちにくい。財政学者の、神野直彦氏は、財政学の視点からも「社会とは他者と共存なしには生存できない人間が共同生活を営む場である。いやしくも社会というからには、他者の成功に献身すれば、自己も成功する」という協力原理が埋め込まなければならない」（朝日新聞「論壇」二〇〇〇年一月十日）と言い、「競争社会」を批判している。

信頼が生まれにくい社会システムの中で、人間の人間らしい基礎をしっかりと育てるのが、乳幼児の教育・保育である。それ故、それが、将来までずっとつながっていくように、発達の出発点の保育・教育を

「（人間）信頼のいずみ・（人間）発達のふるさと」としてとらえ、かつ卒園生と園とのつながりを継続していくという、ここで取り上げたような取り組みが、一層大切になって来ているのではないかと思う。

近年よく保育園・幼稚園の五十・三十・二十周年の記念誌が発行されている。最近そのなかに「保育園は子どもの『故郷』』という巻頭言（園長藤井修Ⅱ京都・たかつかさ保育園二十周年誌 一九九九年十一月）に出会った。こうした視点が当然ながら意識されはじめているようである。

今後は、このような記念誌をきちんと分析し、発達の『ふるさと』という視点からその到達点を明らかにするとともに、姿が変わらない安心感のもてるという故郷となれるための条件を、公立の園においてもつくっていく道や、発達の『ふるさと』という視点からも地域と共同していく方向の探求が求められよう。

（静岡大学）

目をこらして (2)



『もりのへなそうる』という話が大好きな子どもたちと、『へなそうるの赤ちゃんが生まれたよ』という続きの話をつくり、劇にして遊んだことがある。

へなそうるは、へなそうる星に住んでいる。それは、地球から数えて三番目の赤い星ということになった。

「この星がへなそうる星なんだよね」と大きな紙に地図をかき、それを黒板に貼った。ある朝のこと。

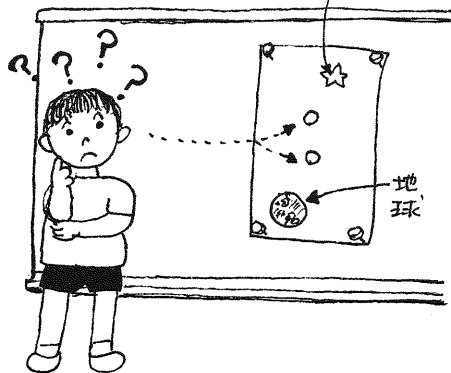
「おはよう」とやってきたS君が、その地図の前に立ち、首をひねっている。「S君どうしたの?」と聞いてみると、S君が考え深そうに言った。

「この緑の星は、何って言う星なんだろうね」

*

へなそうる星は、地球から少し離れていた方が感じがでるよね、という位の軽い気持ちで誕生した一番目と二番目の星。だから私はその星が何星だろうなんて、考えてみたこともなかった。ところが、S君は、全てに意味を見いだしていく。「この一番目

赤い星(へなそうる星)



と二番目の星は何星だろうね?」と考える。

子どもは、自分の身の回りにあるもの全てに、思いを寄せていく。意味を感じていく。S君のつぶやきが、今も私の中に、響いている。

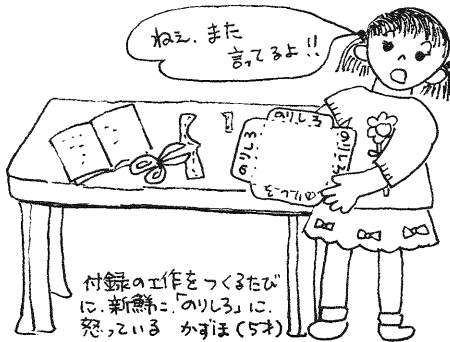


耳をすまして

娘は、小学校入学を目前にした頃から、急に文字に興味をもち始めた。

「これは？」「これは？」と、身のまわりにある文字を片っ端から読んでいく。

そんなある日のこと。



雑誌の付録の作業をしていて、一人でぶつぶつ文句を言っている。

どうしたのかと思って聞いてみると、

「こんな言葉遣い、いけないだよね」と言う。

「え？」と思って娘の指さすところを見てみると、

そこには「のりしろ」の文字が……。

*

身のまわりにある、大人が当たり前のように見ているものが、そうではなくうつっている子どもたちの目。

「何だろう」「何かな」と考える子どもたちの心。

子どもたちのつぶやきに耳をすまます。

子どもたちの見方で見直すと、何だか世界が新鮮に見えてくる。

絵と文 宮里暁美

(目黒区立ふどう幼稚園)

一人ぼっちの僕

三浦 武



自己紹介

私はもう八十の坂を越しましたので、近頃の若い読者にはなじみがないと思うので、最初にちよつとだけ自己紹介をしておきます。

私は昭和二十二年九月から東京保育専修学校の講師となり、昭和四十九年まで二十六年半、児童心理学を担当しました。また昭和二十三年九月からは中野高等

保育学校（今の宝仙短大）の講師となり十八年間児童心理学を担当しました。米軍の空襲で一面の焼野が原となった高円寺の一角に、軍隊の馬小屋を解体した材木を使って幼稚園の建物を造り、その二階で、幼稚園の先生を養成する東京保育専修学校を再開した時私が教えた生徒は僅かに十七名でした。

私は卒業論文では幼稚園児の飽きの実験的研究をやりました。昭和十八年という太平洋戦争最中のことで

した。こういうわけで、「幼児の教育」には私は若い頃は随分関心をもって勉強しました。

父のイメージ・母のイメージ

さて、今回は私の幼い頃を振り返ってみて、私という人間が如何に形成されたかを考えてみようと思えます。

私は大正八年に愛知県の豊橋市に生まれました。八人きょうだいの五番目の子どもでした。今日の少子化の時代から見るときょうだいの人数は多かつたけれど、戦前のきょうだいの数の平均は七人でしたからまあ普通だったわけです。

父のイメージとして今に残っているのは、父の肩車にのせてもらって、父が好きだったビリヤードに連れて行ってもらったことです。

おそらく二歳か三歳の頃のことでしょう。

母のイメージとして残っているのはきょうだい二、三人と一緒に風呂に入れてもらっている光景です。

母はいつも「なんとあらあね」と静岡弁でいついたのを覚えています。

そんなことは何でもないよという意味です。

健康な母は自信があつたのでしよう。少し無神経な方でした。

きょうだいの間では私はすぐ下の妹を何かといじめ、母にひどく叱られました。

これは私の愛情欲求、妹への嫉妬がそうさせていたのだとあとではわかりましたが、当時はとてもわかりませんでした。一番上の姉は八歳年上ですから、学校の勉強のことも姉がいろいろ教えてくれました。もう母親代わりの役割をしていたのでしよう。

祖母の家の二年間

母は丈夫な人でしたが、次々に生まれる子ども世話が大変だったのか、私は小学校に入るまで二年間くらい、静岡県の西部の掛川の在ざいの母の実家に預けられました。大正の頃なので、そこに行くのにはテトテト

というラツパを鳴らして走る乗合馬車に乗って行きました。

母の実家では私の祖母がとても可愛がつてくれました。その家には男の兄弟が四人いましたがもう就職したり大学生になって東京に出ていたりして、祖母は手があいていたのです。祖父は県会議員をしていたので、静岡に行くとき、帰りに必ず森永キャラメルをおみやげに買ってきてくれました。そのキャラメルの空箱を棄てないで大事にして私の部屋の隅に並べておきました。これは幼児のがらくた集めの現象でしょう。

一人ぼっちの僕

さて、小学校に入学するというので、豊橋の家に帰ってきましたが、近所の子は誰もなじみがありません。大正の終り頃はまだギャング・エイジ全盛の頃で、近所の子は集まって集団で遊び廻っていました。

鬼ごっこをしたり、こま廻しをしていました。私は仲間に入りたいたのですが、どうしても入れません。みんな

なが遊んでいるのをただ眺めているだけです。しかしボツンと立っているのも気はずかしいので、誰かと遊んでいるようなふりをしたりしていました。「想像の友達」と遊んでいたのです。これは本当に淋しい思いでした。

私の姉は近所の子とよく遊んでいたもので、その仲間に入れてもらいたかったのですが、女の子の仲間には男の子は入って行けませんでした。

その上悪いことに入学した小学校は本来の学区の小学校ではなく、隣の学区の小学校でした。だから学校に行くようになって、隣近所の子どもたちとは相変わらずなじみがありませんでした。これが私の原体験でした。この孤独感がその後の私の人生にいつもついて廻りました。感情、情緒に係した面がパーソナリティ形成の基本となります。

私が小学校に入学したのは大正十五年です。

小学校入学記念の写真を見ると大部分の子はカスリのつつ袖の着物を着て、下駄をはいています。今から

思うと隔世の感があります。

さて、小学校に入ると、いろいろの勉強をすることに興味をひかれ、孤独感を味わわなくても済むようになりましたが、友達とわいわい騒いで楽しむということとはあまりありませんでした。からだを丈夫にするにはジョギングがいいと思って、朝早く、広場を一人で走っていたこともあります。やはり一人で走っていました。走っているのを人に見られるのが恥ずかしいので、人のいない所を一人で走っていました。中学に入ってから、人気のない川の堤防の上を一人で散歩するのが一番気持ちにじっくりくることでした。

思春期の初めの自我の誕生に伴う孤独感へと成長していったのでしょう。



学生相談と幼時体験

後年東京大学で心理学を専攻し、東京都立大学の助教授となり、臨床心理学を研究してきました。学生相談室長を兼務することになり、学生とエンカウンター・グループの合宿をするようになりました。エンカウンター・グループの合宿では自分の心の奥を開いて話し合います。それができる雰囲気を作るのが大切です。それがうまくいくと男子学生が涙を流しながら話をするようになります。こういうことは普段のキャンパスの中ではとても見られない体験です。エンカウンター・グループ合宿を体験した学生は卒業してもまた合宿に参加しました。私達はこれを自主ゼミと呼んでいます。自主ゼミの仲間には忘年会に私の家集ってくれました。桜の頃には花見の会をやったこともありました。子どもを連れてやってきてくれました。私の孤独感はいかがしたグループ・メンバーとの交流により次第に癒されていきました。学生相談室長としての役割の行

動がいつの間にか私の生き甲斐になっていきました。

昭和五十八年、都立大学は定年となり、東京国際大学教授になってからも学生相談室長を続けました。前後二十年間、学生相談をしました。途中三年間、都立大学付属高校の校長をやっていた時も、登校拒否の生徒をクラス担任の先生から頼まれて、校長室でカウンセリングをやりました。学校に来られない生徒は私の自宅に来て話し合いをしたこともありました。登校拒否は直りませんでした。大検に合格しましたと母親から電話をもらった時は本当に嬉しい気持ちでした。こうしたことに心をくだいてやっていたのは凡て私の幼い頃の孤独感体験の裏返しとしての共感が基本にあったからだと思います。

悩みをもった学生・生徒に、少しでも援助できることが私の生き甲斐になっていました。

来談学生の中には父親との関係がうまくいかず、「お前は平均以下の人間だ」と言われ続けてきたので、「私は平均以下の人間でしようか」としつこく訴

えてきた学生もありました。

ある男子学生は、母がクリスチャンでストイックで教育熱心なためにそれについていけず、母との関係がまずくなり、「私は母を憎んでいる。殺してしまいたい」と手記に書きました。ところがこの母親は私宅まで相談に来て、何とか学校に行くようにしてほしいと訴えました。この学生は結局中途退学になってしまいました。

彼は小学校から高校まで私立の有名な学校に通ったのに……。親が教育に熱心であればうまくいくというものではない一つの事例です。

精神分裂症を病んで、それが治って復学してきたけれど、一般の学生とはしつくりいかなない学生が相談室に来て、無事に卒業するまで話し合いを続けたこともありました。

こうした沢山の事例にそれぞれ親身の対応ができたのも、その底に私の幼時体験があったからと考えられます。

(東京都立大学名誉教授)

保育者を目指す学生との

関わりから見えてきたこと

小倉 定枝

はじめに

私は大学院を卒業後、保育者養成のコースを持つ福祉の専門学校に教員として就職した。約三年前のことである。保育現場での勤務経験があるわけでもない私に、保育を教える資格があるのだろうか

といった不安を抱えてのスタートだった。しかし、子どもたちが幸せな幼児期を過ごせるための保育のあり方について、学生たちと共に学びながら考えていきたいという強い意志だけは十分にあった。そして、大学・大学院を通して学んだ、子どもを中心としてその心に添う保育を、できるだけ保育者として

現場に出て行く多くの学生に伝えていくことができればと考えていた。

しかし、私を待ち受けていたものは、当初想像していた以上に困難な学生とのかかわりであった。私は着任と同時に保育者を目指すコースの新入生男女合わせて六十名の担任となった。担任の仕事は、主に週に一度のホームルームの機会を通じて、学生に事務的な連絡をしたり、必要な書類の回収を行うことを通して、円滑な学生生活のサポートをしていくことである。週に一度のホームルーム以外にも、学生の相談を受けたり、緊急の連絡をしたりなど、学生と関わる機会は日常的に生じた。

多くの学生との関わりにおいては、子どもたちのための保育について共に考えることよりも、むしろ、興味を持って授業に望むこと、自分の行動に責任を持つて行動すること、自分のことばかりでなく他人のことも考えながら生活していくことなどの大切さ

を学生に伝えていくことに多くの時間と労力を費やすことになった。担任として、また授業を受け持つ教員として、三年間にわたる学生との関わりから、感じたこと、考えたことをまとめてみたいと思う。

学生達に見られた傾向

他の専門学校を覗いたことがないので一概には言えないが、ともかく私の勤めていた専門学校の保育者養成のコースでは、教師が前に立って話をすすめるだけでは授業は成り立たなかった。授業はホームルーム単位で行われ、約六十名の学生は毎回同じメンバーで授業に望むことになる。ほとんどの学生が仲の良い友人同士で並び合って座り、授業が始まっても自分たちの会話に夢中である姿を前に、私は途方に暮れた。机の上に肘をついたり、雑誌を広げて友人とあれこれと話しながら読んだり、お化粧道具を取り出して念入りにお化粧を始めたり、ジュース

を飲んだりと、そこは教室という公共の場ではなく、まるで彼らの家のようなであった。

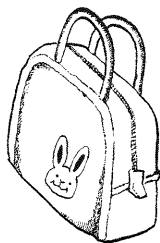
時々、授業を進めているこちらは、あたかもテレビのブラウン管の中にあるような感覚を持った。彼らにとつては、授業を進めている教師は自分たちの世界とは異なる世界、例えるならテレビの中に存在しているのと同じであるように見えた。つまり、多くの学生が自らも教師と共に授業を創り出し得る存在だと認識しておらず、テレビを見ているような受け身の姿勢で授業に臨んでいるのである。授業中に見られるこのような受け身の姿勢は、彼らが学校生活を送る上での基盤となっていたように思う。そして、受け身の姿勢を基盤とした行動には、ある傾向が見られた。

先に述べたように、私は着任と同時に六十名の学生の担任となった。学生と担任の結びつきは非常に強く、学生達は自分の担任を頼りにして学生生活を

送っていた。私が担任していたある学生が保育所の実習に行くにあたって、期日までに実習簿をとり来なければならなかった時、電話をかけてきた。

「先生、今、施設の実習中で他の日はアルバイトがあつて取りに行けないから、途中の駅まで持つてきて」という。「え？それは持つていけないよ」というと、「何で？実習簿の配布が実習と重なつたのは、学校の責任でしょ？じゃあ、学校が何とかしてくれるのが当然じゃん。先生持つてきてよ」という。私は、実習が終わってから自分で取りにくるなり、友達に頼むなりして自分自身で何とかするように言つて電話を切つた。

その他にも、学生達の依頼心を感じる言動は日常生活の随所に見受けられた。学生が書いたレポートに対して「ここを



このように考えるのはなぜ？ そう考える理由も書いてみて」と尋ねても、なかなか 학생は考えてはくれない。すぐに「えー、難しいよ。わかんない。先生が考えて」という答えが返ってくる。自分で考えてみようとしなくて、すぐに匙を投げて、その匙加減をこちらに託すのである。

同じように、学生に自分の行動に責任を持って欲しいと思う機会も頻繁に生じた。提出されたレポートを読んで、そのレポートを書いた本人に「このところは、どういう意味なの？」と尋ねると、返ってくる返事は多くの場合「え？ だって、それは本に載ってるからそう書いたんだよ」といった類のものである。また、ある学生が幼稚園実習で書いた指導案に、保育者の配慮事項として「お弁当を残さず食べている子どもを発表して褒め、他の子どもが残さず食べられるようにする」と書かれていた。そこで、「その子どもを褒めるのは、他の子どもがお弁

当を残さないようにするためなの？ 先生に褒めてもらうためにお弁当を食べて、本当に楽しくおいしーいごはんを食べられるのかな？」と聞いてみた。その質問に対する返事は「だって、私が行った幼稚園では、現にそうやってたもん」というものであった。自分自身が作成したものとや自分の行動に対する責任を、自分なりに引き受けて欲しいと思ったが、それが彼らにとっては難しいことのように思えた。

自分に対する自信

受動的な姿勢を基盤とするこれらの行動の背景には、学生達が自分に対して確固とした自信を持つことができないでいる事実があるように思う。自分に對する自信があれば、自分で書いたレポートや指導案の責任を他人に託すような言動をとることはないであろう。私には、彼らが自分の行動の責任を他人にとってもらうことで、自分自身が傷つくことを免

れようとしているのではないかと思えた。自分に対する自信は、何とか自分でやってみようという気持ちを生み出し、その行動の責任を自分で引き受けていくという態度につながると思う。彼らは、傷つくことを恐れて自分にできそうにないことにあえて挑戦してみようとはしない。

担任していたクラスの学生が、保育園や幼稚園の就職試験を受ける時期になった時のことである。あの幼稚園に見学に行つて帰つてきた学生が、「あの園に行きたいけど、就職試験に鉄棒の逆上がりがあるから受けるのやめるね、先生」という。その理由を訊ねると、「だって、私、逆上がりできないし。皆が見ている前で失敗したら恥ずかしい」とのことである。私は、受験日までは日数があるのだから、あきらめないで練習をしてみるように励ました。しかし、結局彼女は努力をしてみる事なしに受験を諦めてしまった。こうした例を挙げればきりが無い

程、多く学生は傷つくことを恐れ、自信を持ってないでいる自分を守ろうとしているように見えた。

枠にとらわれる学生達―彼らの保育観から―

なぜ、多くの学生はこのように、自分への自信が持てずに自分を守ろうとしていたのであるのか。彼らが今まで受けてきた教育に一つの解を見出せるように思う。

その言動から一見自由奔放に見える学生達であったが、実はある枠組が彼らを支配していた。そのことは、高校を卒業したばかりの学生達が無意識のうちに抱いている保育観から見取ることができるといえる。

入学当初の学生に、ある保育者の子どもへの関わりの事例を読んで感想を書いてもらったことがある。お片づけの時に、保育者が園庭でまだ遊びたい子どもの気持ちを大切に、何度か一緒に滑り台を滑った後、思い思いの乗り物になりきって部屋ま

で帰るといふ事例であった。これを読んだ学生の感想の多くが、「この保育者は、お片づけが始まっているのに、子どもと一緒に遊んでいて良くないと思う」など、お片づけという時間の枠を守らなかつた保育者に対する批判的な意見であった。また、「集団保育をするにあたっては、子ども一人ひとりの個性はなるべく把握しておいた上で、まとめられるようにしたい。この子に合わせてこうするなど、ないようにしたい。みんなで生活しているのだから、みんなに合わせなければならぬことを伝えたい」と述べた学生もいた。

一見、自由奔放に振る舞っている学生達が、意外にも子どもに対しては「くをするときはくをしなければならぬ」といった枠にとらわれていたのである。無意識のうちに抱えているこうした保育観は確固として学生の心の中に位置づいており、そこからなかなか抜け出すことができないようである。



た。学生達は、一通り保育について学ぶと「子どもの自立心を大事にし、一人ひとりに合わせた保育をしたい」と述べるようになる。そう述べていても「けん玉を製作した後、ぶつからないように男女別のグループごとに練習を行うよう声かけをする」等と、子ども達をある枠に従って行動させようとする指導案を書く学生も少なくない。

このように、学生達が枠にとらわれているのは、自分自身がそれまで同じような枠を与えられ、その枠に支配されてきたからではないだろうかと思えてならない。そして、保育の実践や思考を行う際、つ

い自分がそれまで受けてきた教育のあり方に頼ってしまうのではないだろうか。そうだとしたら、これまでの成長の過程において決められた枠に従って生活してきたことが、学生の受動的な姿勢に何か関係がありはしないだろうか。自分が興味を持ったことに積極的に関わったり、取り組んだりすることよりも、決められた枠の中で指示に従って行動することの方を大切にされていたら、誰でも受け身にならざるを得ないのではないか。そして、その枠があることが当然のこととなってしまふと、自分の判断において行動することが困難になる。自分で判断しない以上、失敗しても自分の責任ではなく枠組を作った人間の責任ということになる。自分で決めて取り組み、成功したという体験がなければ、自分に対する自信が培われるはずもないだろう。

一方で、大人が造った枠を取り壊そうと、必死にもがく学生もいた。彼らは、高圧的な態度で枠を示

されると、それに対して「キレル」、暴れるといった形で抵抗した。しかし、こちらが彼らの気持ちに共感し、理解しようと努めていると、毎日のように教務室に寄り、何気ない会話をかわして満足そうに帰っていったり、手紙やメモなどで来訪の痕跡を残していった。私は、彼らが自分の気持ちを理解してもらえんことを求めているように感じた。

自分の気持ちを理解され、自らの興味を大切にされる体験こそが教育において重視されなければならぬ、私は三年間にわたる学生達との関わりの中で、このことをあらためて教えられた気がする。

今、学級崩壊や子ども達の「キレル」行動などが問題となっている。この現象に対処するために、「枠」に子ども達をあてはめ、大人に従わせようとするだけではしてはならないと思うのである。

(元福祉専門学校教諭)

子育ての探究 その七

近世におけるわが子への関心の高まり

柴崎 正行

近世の幕開けとしての江戸時代は、戦いによる支配が終わりを告げた時代でもあった。江戸幕府は各々の国に城下町を作らせることで武士や商人を城下町に集住させ、都市と生産地を分離することによって兵農分離制を完成させ、士農工商と呼ばれる身分制度が確立した。この政策によって民衆支配を確立するとともに

に、それまでは一部の地域に限られていた都市社会が全国的に展開されるようになり、また江戸や大阪というような巨大都市も形成され消費社会を發展させた。こうした都市文化と消費社会の広がりにより、社会の實質的な中心は武士階層から次第に町人層へと移行していった。また農民層も新田の開拓や農耕法の改善な

どによって余剰作物を商品として売ることが可能になったこともあり、経済的なゆとりがもてるようになった。こうした町人や農民層における経済的なゆとりが、子育ての在り方をどう変えていったのであろうか。今回は社会的な安定期にいたった江戸時代において、わが国の子育てにどのような変化が生じたのかを、当時の人々の日記を資料としてみていきたい。

武士階層にみられた子育ての変化

江戸時代の下級武士の生活ぶりとは子育ての様子は、いくつかの日記研究によって明らかにされている。

例えば土佐藩の下級武士である楠瀬大枝が書いた、一八〇九年から一八三五年までの二六年間におよぶ日記を通して、当時の婚姻観や子育て観などが詳細に考察されている（注1）。その日記には、大枝の妻の楯が四人の子を産んだが全員女兒であり男児に恵まれなかったことや、その子どもたちが病気になるたびに

夫婦で看病していること、男児に恵まれなかったことが精神的な負担になったこともあつてか、妻の楯が重い鬱病に罹り、それが原因で大枝から離別された経緯などが書かれている。

この日記からわかることは、当時の武士は家督相続のこともあつて男児の誕生を望む傾向が強かつたし、この楯のように男児を産めないで離縁されることさえもあつたようである。しかし親にとってはどの子ども大事にしていたことは、大枝夫婦が病気の長女楯を徹夜で看病していたことからわかる。当時は病気になる時には、薬師に薬を調合してもらつて飲ませ、祈祷師を招いて必死に無事を祈るしかなかったのである。しかしできるだけのことはしてあげたいという親の気持ちからは、今のわれわれと何



ら変わりがないといえよう。残念ながら当時五歳であつた緞は看病のかいもなく疱瘡で亡くなってしまつたが、その時の大枝の落胆ぶりは大変なものであつた。こうした子どもへの関心は、その長女の成長が普通の子どもより早いといつて喜ぶ様子が日記に書かれていたことにも表れている。このことから、すでに江戸時代には父親であつても子どもの成長の程度に強い関心があつたことが窺われるといえよう。

また頼山陽の父である春水の日記も残されており、その内容も詳細に検討されている(注2)。それを読むと春水の妻である静子は四人の子どもを出産したが、夫の春水が広島藩の儒者であり江戸屋敷に赴任することが多く、そのために妻の静子は家事を一人で切り盛りせざるを得なくて大変苦労していることが書かれている。下級武士であつた大枝でも、土佐藩内や遠くは長崎までしばしば長期間出張することがあつたようである。そんなときには、大枝の母親と妻そして子

どもたちが帰宅を待ちわびていたであろう。

いずれにしても、現在のサラリーマンが仕事の都合で出張したときと何ら変わらない家庭像、親子像がそこには見られたようである。現在も国家公務員や大企業などでは長期間の単身赴任を当然のことのように考へているが、その背景にはすでに江戸時代からの武士階層におけるこうした単身赴任制度の影響があるのかも知れない。

町人層における子育ての変化

町人の子育てに関する研究も多くなされつつあるが、その中でも大都市江戸に暮らしていた娘たちの生活ぶりが次第に明らかになっている。お稽古事に励みながらお雛様などに興じる姿は、まさに現在の女の子たちの姿にも通じるものがある(注3)。

ここではそうした大都市ではない地方の小さな都市に暮らす商人家族の生活ぶりを見てみたい。こうした

商人は現在の商店と同じように家族経営をしており、家が商売の場でありまた生活の場でもあった。ではここで子育てにはどのような変化がみられたのだろうか。それを上州の桐生新町で織屋を営む町人の吉田清助一家の子育てを通して覗いてみよう（注4）。

清助は両親、妻さと、長女いと、長男元次郎の他に、女子六人男子一人の奉公人を抱えていた。清助は桐生に店を構えていたが尾張藩江戸屋敷御召服用問となつたので、江戸にしばしば商用で出掛けることがあつた。時には仕事の都合で江戸にある妻の兄宅や恩師である国学者の橘守部宅に長期間滞在することもあつた。このときに桐生と江戸に分かれた家族間で頻繁に書簡が取り交わされ、それが残されている。

その内容を読むと、清助がいないと妻のさとが織元の一家を切り盛りしていることや、夫婦間の関心事が子どもたちの成長にあつたことなどがわかる。また妻のさととは元次郎が手習いに通っている様子を知らせる

一方で、父の帰りを待ちわびている元次郎に縁起物の白ねずみをお土産として買ってきてほしいと頼んでいる。また長女のいとは官女のお雛様が欲しくてたまらないと父親に手紙を出しているのである。大都市江戸で流行っていたお雛様を自分も欲しいという、今の娘と変わらない娘心が感じられる。

こうした町人家族の子育てよりは、長期間父親が単身赴任している現在のサラリーマン家族の様子と何ら変わることがないといえまいか。わが子が可愛くて、ついお土産を買い過ぎてしまう甘い父親像は、すでに江戸時代の町人層においても見られたのである。ここには子どもを可愛がり甘やかす親と、親に甘えて物をねだる子ども像があり、先程ふれた武士階層と同様に、自分の子どもたちに関心を注ぎ大切に育てようとする、子育て意識の大きな変化がみられる。

富農層における子育ての変化

では富農層の子育てはどのようなものであったろうか。その様子を上州は勢多郡にある原之郷村の富農船津家の生活ぶりから推察してみる（注5）。

一七九二年の記録によると、船津家には家主の重郎兵衛とその妻と五歳になる男児、弟の松之助夫婦という五人が暮らしていたが、間もなく弟夫婦は分家独立した。この頃の原之郷村は複合家族が分家して、単直系型の核家族が中心となっていたという。この船津家の生活ぶりを当時の資料からみると、文字文化への学習意欲が強く、読み書きの学習はもちろんのこと、俳諧から和歌、漢学にいたるまで幅広く学んでいたようである。また豊富な衣装や家具を購入し、農閑期には余暇を利用して江戸や伊勢など遠くまで頻繁に旅行をしていたという。日常の食事は、銘々膳で一家揃って食べ、かなり余裕のある生活ぶりであったことが窺われる。またこの船津家は地域の手習い塾も開いており、地域の子どもたちに読み書きを教えている。

このことから、富農の子どもたちもすでに読み書きを習い、親が旅をするといろいろなお土産をもらっていたことが予想できる。

加賀国石川郡御供田村の富農である土屋又三郎の描いた「農業図絵」には、年間の農作業の要点が描かれており、その絵から農家の様子を窺い知ることができ（注6）。そこには稲刈りや脱穀というような農作業は、女性だけでなく老人や子どもたちも参加しており、まさに一家をあげての労働であった。特に女性には、田植えや稲刈りだけでなく、除草や養蚕、機織りというように一年を通して働いていた。しかし牛馬を使つての農耕や鋤を用いるような力仕事は担っていないかたようである。こうして農業では男女の仕事分担が行き渡つていき、実際の子育ては仕事をしながらほとんど女性に任されていたようである。

この船津家の資料や農業図柄などから当時の地方の富農層の子育てぶりが予想できる。昼間は家族で農業

に従事していたが、夜になると夫は文化的な趣味を楽しみ、女性は子どもの世話を担っていた。富農層の男性の多くが読み書きができ、経済的にも余裕があつて消費生活を楽しんでおり、文化的な趣味も有しており博識であつた。また江戸時代中期以降は、こうした富農層も単婚直系家族を形成するようになったために、おそらくは自分の子どもへの財産の継承という問題も含めて、親のわが子への関心は高まつたものと考えられる。経済的な余裕も合わせて考えると、富農層でも子どもたちへの愛着は高まつたものと予想させられる。

貧農層における子育ての実態

それに対して貧農層の子育てはどうであつたらうか。江戸時代は貨幣経済の発達によつて、一般農民の間でも貧富の差が大きくなつてきた時代でもある。農地を手放して小作人として働いていた下層の農民はどのような結婚や出産をしていたのだろうか。貧農の男

児は、長子以外は豪農のもとで仕事を手伝つたり、早くから職人や商人などのもとに見習いとして奉公に出されるが多かつたようである。また女兒は豪農の家に下女に出されたり、大きな商家に奉公人として出されることが多かつた。その中での結婚や子育ては、中世と変わらない厳しさがあつた。

多摩地方の柴崎村（現立川市柴崎町）の鈴木家で住み込みの下女をしていたさんが一八四四年に妊娠したので、その相手を問い詰めて内輪の婚姻をあげさせた。その後には出産したので、さんの母親が代理として鈴木家に住み込んで下女として働いた。出産後三週間目にさんは無事仕事に復帰したので、母親は今度は家に戻つてきんの代わりにその赤子の世話に当たつ



たという。また同じく鈴木家の下女のうたは妊娠した
が実家に帰って墮胎し（二八四八）、その後結婚し
たという（注7）。

このように貧農層においては、男性も女性も結婚や
出産もなかなかままならなかった。下人の労働力は、
主人にとって欠かせないものであり、もし病氣や出産
で休むときには「奉公人請状」という契約書によって
代理の働き手を差し出さねばならなかったし、もしそ
れが不可能であれば働き続けるために墮胎するしかな
かったのである。江戸時代においても墮胎が行われ
ていたが、その背景にはこうした労働者層として雇わ
れた貧農層の苦しみがあったといえよう。町人層や富
農層と比べると、貧民層の子育てはまだまだ厳しいも
のであったといえよう。そして飢餓などでは、その貧
民層が一番苦しい立場におかれたのである。私の印象
にあった子殺しは、まさにこの貧民層の実態でもあつ
たといえる。

（東京家政大学）

注

- 1 太田素子『江戸の親子』中央公論社 一九九四年
- 2 鈴木ゆり子『農村女性の結婚』（林玲子編『女性の近世』
中央公論社 一九九三年）
- 3 森下みさ子『娘たちの江戸』筑摩書房 一九九六年
- 4 高橋敏『家族と子供の江戸時代』朝日新聞社 一九九七
年
- 5 高橋敏 前掲書
- 6 長島淳子『働く農村の女性たち』（林玲子編『女性の
近世』中央公論社 一九九三年）
- 7 増田淑美『農村女性の結婚』（林玲子編『女性の近世』
中央公論社 一九九三年）

三学期、ある日の保育から

上坂元 絵里

一月始め、羽子板・羽根・お手玉をカゴに入れて保育室に置いてあった。隣の組の廊下でフリーの先生と年長の子が羽子板をしているのを見て、A子が私とやりたいと言ってくる。四月生まれのA子は、かなり器用で三回位は続く。S夫とY夫が保育室の扉越しにやりたそうに見ていたので声

をかけて誘う。S夫もまた、こつを掴むのが早く真剣な表情である。私も思わず楽しくなってしまふほどだった。Y夫は、こういうふうにやりたいというイメージははっきりしているものの、いざやってみると、「あれ、頭で考えるのと実際にやるのとは違うぞ」と感じ。O夫とK夫も誘う

と、O夫「どっちでもいいよ」と答える。こういう時に素直にやりたいと言えないのが、いかにもO夫らしい。しかし始めてみると、予想以上に上手で本人も楽しくなってくる。一方のK夫は、慎重過ぎてなかなかうまくいかない。

私の方も、相手が打ちやすいように打とうと相当必死になる。それでも不覚にも空振りを連発、子どもたちはそれもおもしろがる。どの子も保育者とやることで少しでも続くことがおもしろく、隣の組のR夫まで加わって五対一で向き合うことになってしまう。ちよつと自信を持ったS夫、O夫はどんどん積極的に私に羽根を打ち返して行く。Y夫はにこにこしながら、控えめに待っている。K夫は見物に回ってしまい、せっかく最初に始めたA子は、いなくなってしまう。保育者中心のやりとりが、ずっと続くものかどうかと思い、二人ずつの組になるように働きかけてそこを離れ

る。しばらくして様子を見ると、A子が戻って友だちに打ち方を教えていて良かったと思ったものの、やはり子ども同志ではあまり長くは続かなかつた。

その後、今度はお手玉を手にとつて遊んでいる。少したつと、S夫が二つの玉でできた得意げに言いに来る。私はその様子を見て、一つのことで自信を持つと次のことへの挑戦する気持ちが出てくるのかなと感じ、また、普段は泣き虫でなかなか立ち直れないS夫の力のある別の面を見た思いがした。その横で、K夫が自分もできると必死でやってみせる。先程の羽子板のときの自信のない印象があつたので、今度はできて良かったと思う。

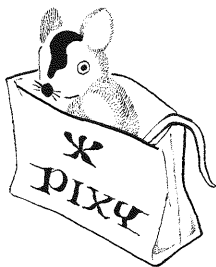
こうした場面では、できる、できないがはつきりと見えるし、友だちと比較する視点も生まれやすい。私は、いっしょに羽子板をしながら「○○

ちゃん、すごい！ 三回も続いたね」「あつ、惜しい」などと感嘆の言葉を発していた。真剣に取り組む充実感や、できるようになる喜びを共に味わいたいと思ったからである。だが、こうした保育者の反応は、評価的な要素も含んでいる。私の中には、こうした言葉をかけたことがよかつたのだろうかという迷いが残った。

「そんな事を考えていて、二学期のある日の場面を思い出した。おべんとうを食べながら、S夫が「僕は（プールで）ゴーグルをつけてるけど、Hくんはまだつけてないんだよ」と話しかけてきた。私は「H夫のほうが体格もいいし、何でも出来るように思っていたけど意外。小さい頃からスイミングスクールに通っていて、こういうランクづけをどう思っているのかな？」と、ちよつと心に引っかけた。さらに、その数日後にH夫がS夫に話しかけているのを見かけた。「あのね、ほ

くもね〇〇に合格したんだよ」と。それを聞いてS夫は「本当！ やったね！」と応え、ふたりで手を取り合って喜んでいたので。少し出来過ぎかなとも思うが、私はこの光景を見て考えさせられた。小さい頃から競争心を植え付けるような場にも子どもを置けば、早くから劣等感や嫉妬など好ましくない感情を持つことにつながるのではと思っていたけれども、周囲の大人が、その子なりの進歩や努力を見取り、やさしい気持ちでかわれば、子どもたちはこういうふうに関心する心を自然に持てるようになるのかしらと。

お手玉に飽きたH夫たちは、ボンボンと投げることを始めた。私はそれを見て、的投げのような



ゲームを思いつき、大きな紙を取り出してアイデアを投げかけた。子どもたちは、いくつか書いてみたものの、それで遊ぶことはせず、紙を裏返すとH夫が中心になってすごろくを書き始めた。私はそれを見て四歳児にすごろくは難しいのでは？

長続きしないのでは？ と内心思う。H夫、S夫、F夫、K夫は額を寄せ合うようにして、マスを書いたり色を塗ったりしている。私は厚紙でさいころくを作って渡す。

おべんとうをはさんで、H夫、K夫が早速続きを始める。それぞれの駒が必要なのはと、とっさに思いついたアイデアでフィルムケースに色をつけたらと伝える。F夫、K夫、B夫、Y夫、H夫の五人。B夫は手が汚れてうまく塗れないというので、私が手伝ってきれいに塗る。ところが、そのおかげで一歩出遅れてしまい入りそびれる。しかし、少したつて見ると、なんとか加われたよ

うだったの、ほっとする。遊び方を見てみると「一周走る」に止まると、保育室を自分がひとまわり走って戻るといったアイデアが盛り込まれていて感心させられる。Y夫などケラケラと笑いながら、遠目にもとても楽しそうにやっている。フリーの先生もちようど通りがかつて「おもしろいですね」と感心して見て行く。私としては、予想を越えて遊びが具体的に実現し、子ども同士やり取りがあつて、よく遊んで良かったと感じていた。

帰りの支度の時間、H夫がさいころを持って帰りたいと言う。H夫だけに作ったものではないからと、ちよつと迷うが「今日、遊んだすごろくが楽しかったのかな？」と思い、「明日、忘れないで持ってきてね」と伝える。B夫がコートを着るのを手伝おうとすると、手に先程の駒を持っていて、私にこれいらないと不満げな表情で渡す。私

としては、何とか仲間に入れたのかと思っていたのと、ていねいに塗ってあげたものなのにといい思いで「じゃ、持って帰らないで引き出しに入れておいたら？」というが、首を振るのでそのまま預かる。隣に座ったH夫が「僕は、引き出しにしちまうてあるよ」と言うので、「また、明日遊べるものね」とこたえると、「でも、あのすごろくちつともおもしろくなかった」という。H夫は中心となつて遊んでいた印象だったので、これも意外に思う。

このすごろくのように、子どもたちのちよつとした動きにヒントを得て、保育者の方からこうしてみたらと働きかけることができたとき、保育者は、子どもが始めたことを一歩深めるかかわりを持つたと満足感を抱く。共通のイメージのある遊びを、幼稚園にある材料を使って子どもたちなりに再現して遊んでいるのを見ると嬉しく思う。こ

れは、私の正直な感じ方である。けれども、もっと大切な、そこにかかわった子どもたちのひとつひとつの場面での心持ちに思いを馳せるとき、その全てを保育者が理解することはとても難しい。それでも、すごろくの例では、たまたまお帰りのつぶやきを耳にして、少しだけ子どもの思いに気がつけた。「遊びの充実」と言いながら、「遊びの形」に気を取られ、ひとりひとりの子どもの思いを見落としがちな自分があると感じた小さなきごとである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編 集 後 記

映画「えんとこ」が、近くの市民館で上演されることを知り、早速、見に行きました。

この映画については、金田先生が三月号で紹介されました。その中のアンケートから、十歳から六十三歳までの幅広い人達がこの映画に共感し、この映画に励まされていることを知り、私も機会があれば見てみたいと思っていた矢先でした。

主人公の遠藤滋さんは五十歳。完全には歩けなくなつて十年になります。地域で自立した生活をしていきます。それを支えているのが一日三交代で介助する若者たちです。

彼らはそれぞれの言葉で、ここに

来ることで励まされていることを語ります。それを見ている私は、とてもうれしくなりました。一方で、なぜ、寝たきりの遠藤さんにそれだけ「励ます力があるのか、不思議に思いました。

後で『えんとこ』という本を読みました。そこには、「ボランティア」には、助けることと自発的という両方の意味があつて、ここでは、まず「自発的」な遠藤さんが、何かをやつてみたい若者の背中を「ちよつと押した」のだ、だから、ボランティアの一人目は遠藤さんなのだ、ということが書かれていました。見ている私がうれしくなつたのは、若者と遠藤さんの自発性の出会ひだったのです。私も、そのことに励まされていたのだと気づきました。

(A)

幼 児 の 教 育

第九十九巻 第五号

(二〇〇〇年五月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十二年五月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二二-一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-1860 東京都港区三田五二-一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込 六一-四一九

〒〇三二五三九五-一六六一三(営業)

〒〇三二五三九五-一六六〇四(編集)

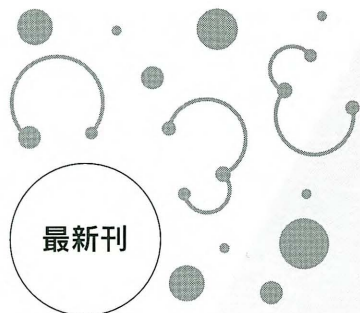
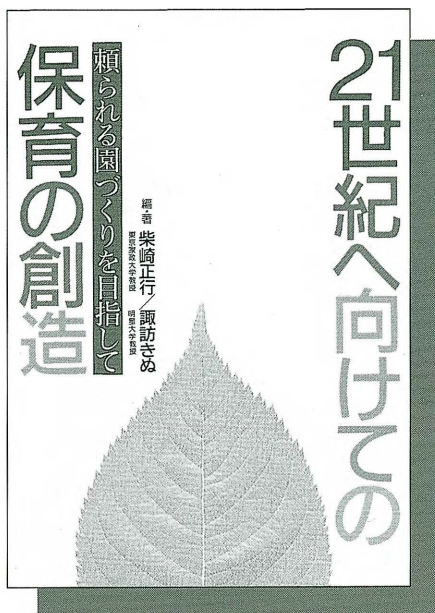
振替 〇〇一九〇〇-一-一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

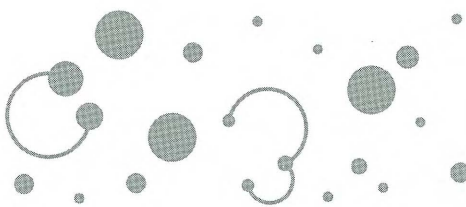
頼られる園づくりを目指して

21世紀へ向けての保育の創造



最新刊

幼稚園教育要領、保育所保育指針の改訂を踏まえ、単なる制度改革解説の域を越えて、先進的な実践事例を取り上げながら、改革における意義や問題点にも言及しています。まさに今現場で知りたいと強く望まれている内容となっています。



柴崎正行・諏訪きぬ 編著

A5判 224頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレイベル館

最新刊!!

〈平成11年改訂〉対応
**保育所
保育指針
解説**

平成11年に改訂された
新保育所保育指針解説書の決定版!!
今回の改訂作業の中心となった
石井哲夫・増田まゆみ先生と
保育界を代表して
岡田正章保育学会会長とによる責任編集。
保育者の疑問に答えるQ&Aに1章をさくなど、
わかりやすく、ていねいな解説を☆
心がけた一冊です。

石井哲夫・岡田正章・増田まゆみ／編

A5判 240頁 定価：本体1,500円＋税

キンダーブックの
フレール館